

Title	近代の家族生活とピアノ文化
Sub Title	Modern family life and piano culture
Author	水野, 宏美(Mizuno, Hiromi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2001
Jtitle	哲學 No.106 (2001. 3) ,p.59- 91
JaLC DOI	
Abstract	The purpose of this thesis is to consider the relation between parent-child relations and culture in modern family. My concern here is mainly children's practice on the piano, so-called, piano culture and its parent-child relations. I would like to emphasize certain similarities of piano culture in the type of modern family. Piano culture existed from the very era when the modern family was formed, and was supported historically by the modern family both in the West and the East. Modern family has an ascetic Ethos to the education of children in the family. So, it is not unreasonable to think that piano culture is a symbol of modern family and a device to perform modern family. I attempted to adopt Kamakura city for my case study and interviewed 10 residents. It is generally considered that the socialization in modern family had a feature that the parent played a main role in socializing the child. With the advent of historical and economic developments, the parent-child relation have been diversified. The conclusion is that parents tend to desire the child-centered socialization or have the child take his or her own responsibility and control by himself or herself.
Notes	特集変容する社会と家族 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000106-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代の家族生活とピアノ文化

——水 野 宏 美*——

Modern Family Life and Piano Culture

Hiromi Mizuno

The purpose of this thesis is to consider the relation between parent-child relations and culture in modern family. My concern here is mainly children's practice on the piano, so-called, piano culture and its parent-child relations.

I would like to emphasize certain similarities of piano culture in the type of modern family. Piano culture existed from the very era when the modern family was formed, and was supported historically by the modern family both in the West and the East. Modern family has an ascetic Ethos to the education of children in the family. So, it is not unreasonable to think that piano culture is a symbol of modern family and a device to perform modern family.

I attempted to adopt Kamakura city for my case study and interviewed 10 residents. It is generally considered that the socialization in modern family had a feature that the parent played a main role in socializing the child. With the advent of historical and economic developments, the parent-child relation have been diversified. The conclusion is that parents tend to desire the child-centered socialization or have the child take his or her own responsibility and control by himself or herself.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程（社会学）

1. はじめに

(1) 〈ルソーの夢〉

1812年にロンドンで出版された〈ルソーの夢〉というピアノ曲の旋律は、その爆発的なヒットのために世界中に知られるようになった。この曲は変奏主題として、とりわけピアノにおいて注目され、様々な作曲家により、独奏用・連弾用など様々に書き換えられた。さらに讃美歌、恋愛歌、子守歌、アメリカ民謡、子どもの歌として各国で愛唱されるようになる。例えば次のような歌詞がつけられた。「結んで開いて手を打って結んでまた開いて手を打ってその手を上に結んで開いて手を打って結んで」。

本稿のはじめに〈ルソーの夢〉を取り上げたのは、「ピアノ・レッスンを通して、〈ルソーの夢〉が欧米で流行した時期が、ヨーロッパの間革命期(1789-1848)以降の中間層の拡大期であり、近代家族の実現期と重なる」という点で重要だからである。一方ではまだ児童労働が盛んに行われていた19世紀に、親は子どもに高価なピアノを買い始める。そして20世紀にかけて、この、子どもたちがピアノ・レッスンをする習慣（以下、ピアノ文化）が、近代的な家族生活の、特に近代的な親子関係の中で、ヨーロッパだけではなく、アメリカ、そして日本、韓国など東アジアの国々にも共通して見られるようになる。

(2) 本稿の目的と構成

アリエスらによる「近代家族の相対化」は、家族研究、中でも親子関係の研究⁽¹⁾に決定的な影響を与えた。親子関係の相対化〔渡辺, 1999〕の議論も見られる。つまり、親の担い手、親をすること (parenting)、母親や家族に特化した養育役割など諸々の相対化である。戦後のアメリカ社会学の影響下に核家族論を前提とし、近代家族を自明視してきたことへのこうした反省は不可避である。その近代家族の揺らぎ、自明性の崩壊の中

で、本稿も近代家族の自明視に疑いをかけつつ、ここでは、世代を受け継いでいく個々人の中のどのような揺らぎが近代家族の揺らぎとして現れるのか、ライフスタイルや文化の面から問いたい。21世紀が始まった今が、ちょうどその時機であるように思われる。ブルデューを始めとして、趣味と階級の関係についての研究は蓄積されてきたが、家族モデルと文化の関係についてのミクロな研究はない。そこで本稿では、このピアノ文化に注目し、ピアノ文化についてのインタビュー調査の分析を通して、親子関係の変容を考察することを目的としたい。

落合恵美子は、近代家族⁽²⁾を19世紀近代家族と20世紀近代家族の二つに区別する。19世紀の近代家族は中産階級のものであり、そこには家事使用人がいた。家事使用人自身の家族は近代家族ではない。家事使用人を雇う家族だけが近代家族であった。中産階級による啓蒙と労働者自身の上昇志向があって、20世紀には近代家族が大衆化する。家事使用人自身の家族が近代家族になるのである。日本でのそれを落合は「家族の戦後体制」と呼んだ。この分類を落合は人口学的に裏付けている〔落合、1997: 97-114〕。ヨーロッパおよびアメリカの19世紀近代家族は、19世紀前半頃のブルジョワであり、日本の19世紀近代家族は、20世紀前半頃から高度経済成長期以前までの都市の中産階級である。ヨーロッパおよびアメリカの20世紀近代家族は、19世紀後半から二つの世界大戦の戦間期頃までの労働者であり、日本の20世紀近代家族は、戦後の高度経済成長期において成立したサラリーマン家庭である。

以下2章においては、ピアノ文化拡大の外的要因をマックス・ヴェーバーをふまえて検討し、3章においては、ピアノ文化拡大の内的要因を近代家族のイデオロギーから検討する。4章は、この意味づけをふまえた、親子関係の具体的な検討である。ここでは、1998年に神奈川県鎌倉市で実施したインタビュー調査に基づいてピアノ文化における親子関係を分析し、5章では、19世紀近代家族、20世紀近代家族、近代家族の揺らぎの

中でのピアノへの意味づけの変遷を総括し、その三段階論の中で揺らぎを考察する。

2. ピアノ文化の外的要因

(1) 気候的要因

ヴェーバーは音楽社会学⁽³⁾の中で、近代の和音和声的音楽の基本楽器であるピアノが家に閉ざされがちなアルプス以北の地理的に厳しい自然環境で発展したことを強調した。

ピアノ文化の担い手が北欧の諸民族であったことは、決して偶然ではない。彼等の生活は、南欧とは反対に、ただ気候の点だけからしてもすでに家に結びつけられており、“家”に中心をおいていた。南欧では気候的歴史的な諸理由からして、アルプス以北の人であったが、それは適度の室内空間に見合った家庭楽器ピアノは、地理的自然的環境だけからして、市民的な家庭の楽しみというものが遙かに立遅れていたもので、そこで発明されたピアノは、すでにみてきたようにわれわれの処でのように急速には広まらなかったうえに、われわれの処でとくに自明のこととなっている程度には、市民的“家具”としての地位を獲得してはいないのである [Weber, 1921=1967: 238].

ピアノは南欧、イタリアのフィレンツェで発明された。メディチ家コジモ3世の長子フェルディナンドのために、専属のチェンバロ製作者クリストフォリが1698年、強弱（フォルテピアノ）がつけられるチェンバロを製作した。これがいわゆるピアノの誕生である。これはチェンバロの形通り、54鍵（4オクターヴ半）、奥行2メートル以上のグランド・ピアノ

で、18世紀にはピアノは貴族のための娯楽楽器であった。ピアノはイタリアで生まれながらイタリアでは発展せず、市民的な家庭の楽しみという文化のあるアルプス以北のヨーロッパで発展し、家庭の室内空間で楽しまれた。中産階級が台頭した19世紀にはピアノは二つの方向性をもって製作された。一つは、大型・大音量でダイナミックな演奏をするためのコンサート用ピアノ、もう一つは、より小型で廉価な家庭用ピアノである。アップライト・ピアノは1800年頃に現れ、1830年代には普及した。

冒頭に述べた〈ルソーの夢〉、『おとめの祈り』のようなサロン音楽はこの頃に流行した。ピアノ教師、アマチュア向けからプロ向けまでのピアノ教則本は急増した。演奏家やピアノ製作会社が積極的に推奨した指の鍛錬器具や矯正器具もある。五本の指をそれぞれ独立させて動かせるようにするための指の筋力増強器具や、指を高く上げると上達するという当時の考えから指を反り返らせるための器具、特に動かしにくい薬指と小指でのトリル（装飾音）が美しく弾けるようにするための指の急速運動器などが考案された。

ドイツ・ビーダーマイヤー時代（1815頃-48頃）には、戸棚ピアノが製作された。これは四角い縦長の箱に両開きの扉がついていて外からは戸棚に見えるが、扉を開けると内部は弦を垂直に張るアップライト・ピアノになっている。また弦は高音部になるにつれて短くなるので、その上部の余った空間には、楽譜や食器・小物を置くための収納棚をしつらえてある。楽器としてのピアノの機能と、居間で必要とされる他の機能が備わっている。他にも、鍵盤数は少ないが、裁縫箱ピアノ、化粧台ピアノ、文箱ピアノなど多様なピアノが製作された。蓋をすればサイドテーブル、蓋を開ければ鏡、鍵盤の下に引き出しがついている。

(2) 技術的要因

アメリカがピアノの弦を張るためのフレームを鉄で継ぎ目なく作ったこ

とが、ピアノを気候の変化に堪えうる物にした。また鉄のフレームができたことで、オーケストラの音域をカバーする今日の88鍵のピアノが完成したのである。蓄音機（1876年発明）や音響機器がまだ普及していなかった時代、オーケストラ作品はピアノ曲に編曲されて初めて、家庭音楽にとって親しみ深いものとなったのである。ヴェーバーが音楽社会学を書いた1911年頃から、ピアノ生産はアメリカで第一次ブーム（1910-20年前後）を迎えた。

アメリカでは、技術革新によってピアノはさらに機械化され、自動ピアノが誕生する。ヴィルトゥオーゾのピアノ演奏の際に鍵盤やペダルの動きをロールペーパーに記録し、それをロール用のアタッチメントのついたピアノで再生すれば、ヴィルトゥオーゾそのままの鍵盤やペダルの動きを忠実に再現する、というものであった。家庭に居ながらにして名手の演奏を楽しむことができるのである。だが、アメリカを中心とした自動ピアノのブームは、世界恐慌後1930年代に入ると急速に衰えて完全に姿を消し、安価な蓄音機がそれに取って代わった。

そしてピアノ生産の第二次ブームは、1970-80年代の東アジアで起こった。日本は戦後、自動車生産のベルトコンベア式を採り入れて大量生産に成功し、今日では一年間に世界で作られる三分の一のピアノは日本製である。1950年代にピアノ製造を開始した韓国（英昌社、三益社）は、日本、アメリカに次ぐ世界第三位のピアノ生産国になっている。ピアノの騒音問題⁽⁴⁾が生まれ、ピアノ防音室やサイレント・ピアノが考案されるほどであった。1983年には電子ピアノ・クラビノーバが発売されている。

ヴェーバーは音楽社会学において、家庭の室内空間に適度な大きさであるピアノが、アルプス以北のヨーロッパという地理的に家に閉ざされがちな地域ゆえに、市民的な家庭の楽しみという文化をもつ、北欧の諸民族に広まったことを述べた。だが、ピアノ文化はアルプス以北のヨーロッパだけにとどまらなかった。気候の変化に堪えうる鑄鉄フレームのピアノが作

られ、アメリカにも東アジアにも広まった。ピアノ文化は、気候やピアノのそのものの技術的な困難を乗り越えて、なぜここまでグローバルに普及したのであるのか。それを以下で検討しよう。

3. ピアノ文化の内的要因

(1) 近代家族のイデオロギー

アルプス以北のヨーロッパは家に閉ざされがちなので、市民的な家庭の楽しみとしてピアノが発展した、とヴェーバーは考えたが、ピアノには楽しみ以上により深い意味、近代家族のイデオロギーが込められていたと考えられはしないだろうか。

18世紀末には、ジャン＝ジャック・ルソーをはじめとする社会思想家が、ブルジョワ家族を広める役割を果たした。例えば『エミール』には、理想的な家族像が描かれている。

母親がすすんで子どもを自分で育てることになれば、風儀はひとりでに改まり、自然の感情がすべての人の心によみがえってくる。国は人口がふえてくる。この最初の点が、この点だけがあらゆるものをふたたび結びつけることになる。家庭生活の魅力は悪習にたいする最良の解毒剤である。わずらわしく思われる子どもたちの騒ぎも愉快になってくる。父と母はますますたがいに離れがたく睦み合うようになる。夫婦の絆はいっそう固くなる。家庭が生き生きとしてにぎやかになれば、家事は妻のなによりも大切な仕事になり、夫のなによりも快い楽しみになる。こうして、ただ一つの欠点が改められることによって、やがて一般的な改革がもたらされ、自然はやがてそのすべての権利を回復する。ひとたび女性が母にかえれば、やがて男性はふたたび父となり、夫となる

[Rousseau, 1762=1962: 40].

19世紀を通してヨーロッパでは近代家族が一般化し、家事を執り行う主婦が誕生し、家族愛が重視され、親は子どもをしつけ、教育するようになる。それには社会政策も大きく関与していた。国家がブルジョワ家族を理想的な家族として、労働者家族や農民家族にも普及させようとしたのである。労働者家族は、労働力を有する家族員が全員就労して家族の生存を支えるという伝統があったため、18世紀の産業革命は、労働者家族の女性と子どもに肉体的限界を超える過酷な労働を強いた。それに対して、国家は工場法を制定し、女性や子どもの工場労働を制限することによって彼らを公的世界から排除し、男性労働者の賃金に家族手当を加えることによって、近代家族の形態をとりやすくした。実際に男性労働者の収入だけで家族を養えたのは半数以下だったと言われるが、国家は子どもを育てないで働かせる親を非難し、そのような親から子どもを引き離して施設に保護する法律をも制定した。欧米の先進国では、このような過程を経て20世紀前半までに、実態においても近代家族が優勢になる。

(2) 経済的要因

ピアノはどの時代にも決して安くはなかった。ヨーロッパの1820年代までの平均的なピアノの大きさが幅約1.25メートル、奥行約2.5メートル（今日のフルコンサート・ピアノの大きさ）であることを考えても、まずピアノに見合う広さの部屋が必要であり、ピアノの小型化および廉価化が進みつつあった1850年代になっても、それはイギリスの事務員や熟練工の一年分の所得に当たっていたからである。日本の大正時代には、国産のピアノがまだ充分なでき具合でなかったこともあり、何倍も高価な輸入ピアノが売れていたが、それは庭付き一戸建てと同じくらい高価なものであった。ピアノは、夫の所得だけで十分な生活をすることができ、妻が主

婦として家事と育児に勤しむことができる新興のブルジョワ家族、つまり19世紀近代家族だけが持つことを許された楽器である。日本では、ヨーロッパに対する羨望も強かった上に、上流の人々にはヨーロッパ化されていることに対する優越感が強かった分、ピアノへの夢はヨーロッパ以上であったかもしれない。

20世紀近代家族になると、子どもにピアノを習わせることのできる家族が増え、国民のピアノ保有率も増加した。そしてこの時期、ピアノに関わる極めて多くの教育産業も起きている。ここにピアノ文化は絶頂期を迎える。ピアノの需要が急速に伸びた原因は、主として三つ考えられる。第一に、労働者の賃金上昇に伴う生活水準の上昇が、可処分所得を余暇のための出費に残し、購買能力を引き上げたこと。第二に、ピアノのレッスン費用や楽譜が安くなり機会が広がったこと。第三に、分割払い購入法導入が、労働者階級のピアノ需要を増幅させたことである。ピアノは、ローンによる分割払い購入法が最も早く導入された商品の一つなのである。だが、分割払い購入法を利用してピアノが買いやすくなったとはいえ、20世紀近代家族の時代にも、依然として経済的要因は大きい。経済企画庁の『家計消費の動向』によると、2000年に年収1200万円以上の世帯ではピアノの普及率が43.6%、300万円以下の世帯では8%なのである。だが経済的な余裕があるとしても、なぜわざわざピアノを買うのかも問題にしなければならない。

(3) 教育的要因

家庭にピアノがあるということは、ただ単に経済的なステイタス・シンボルだけを意味したのではない。ピアノは収入の多い禁欲的で勤勉な親が自分自身が弾くためではなく、近所の子どもに弾かせるためでもなく、自分の子どもに弾かせるために入手する物であり、ピアノ文化は自分の子どもの教育でもある。そこには近代家族のイデオロギーが強く働いている。

ピアノ産業と連動して、教則本の出版も増加し、音楽教室も普及し、19世紀半ばには指のための筋力増強器具まで開発され利用されたのだから、「神童」養成が真剣に行われたこともまた明らかである。

また、ピアノは練習し続けなければ上達できず、練習を怠ると以前は弾けていた曲も弾けなくなってしまうという性質を持っているので、親は子どもに練習を促さなければならない。親にとっては子どもに忍耐強さや勤勉さを教える場でもある。つまり、子どもをかわいがる愛情や、子どもの教育に向けての強いエートス（アリエスによると近代的な親が持つ二つの特徴）を持たなければ、ピアノを手にすることはできないのである。ピアノは、行き届いたしつけや教育を施す「良き家庭」のバロメータであった。

(4) ジェンダー的要因

ヴェーバーの伝記によると、1873年頃、9歳のマックスは毎日午後30分ずつピアノのレッスンをしていた[Weber, Marianne, 1926=1963/65:35]が、管楽器はもちろん弦楽器でさえ、女子が弾くことは好ましくなかった時代に、ピアノのイメージとしては断然女子であった。女子がバッハやベートーヴェンの曲を弾くことは好まれなかったが、小品や変奏曲、メドレーなどを弾くことは美德であった。ピアノは小型化してもやはり大きく、持ち運びが不便という意味で家に縛り付けられがちな楽器であり、女子はピアノという華やかな嫁入り道具とともに、確実に家の中に囲い込まれたのである。

日本にはピアノ以前に琴の文化があったが、中産階級が台頭する大正デモクラシー時代にはやはり良家の女子が洋琴（ピアノ）を弾いていた。これは当時、社会や家族が性別役割分業・良妻賢母を必要とした、ヨーロッパと同じような背景に強く裏付けられていると言えよう。

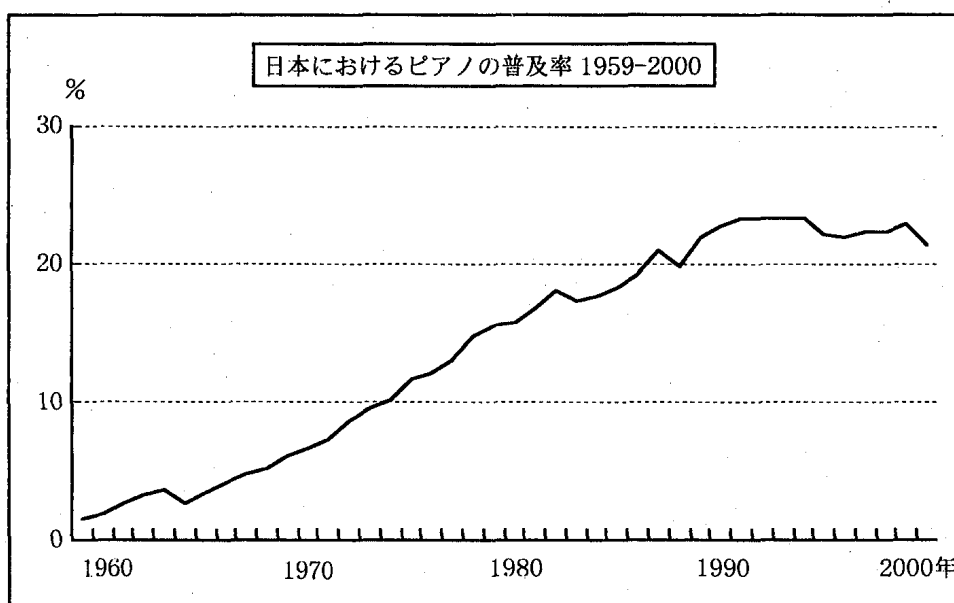
(5) 資本的要因

このような性別役割分業の内面化は、他者による承認を得ることができる。ピアノ文化は資本を帯びているのである。ピアノは他者に対して「良き家庭」を見せるための恰好の道具であり、その意味で当然客間、応接間に飾られるようになる。19世紀ヨーロッパでは、娘がピアノ、弟がフルート、父親がヴァイオリンやギターを弾く、というモチーフの家族画も多く描かれた（母親は満足げにすべてを見渡している）。そしてただ単に客間にピアノを飾るだけでは済まなかった。

実際に子どもがピアノを弾けるかどうか、その家族を判断する目安になったので、子どものピアノ演奏は、結婚や一家の浮沈にも関わる重大事となった。というのも、子どものピアノ演奏は、親に対する子どもの従順、日々の努力、自ずと演奏に表れる子ども自身の教養や感性といったものを、家族の教育成果として、社会的に認めさせることになるからである。19世紀にピアノ演奏の場であったサロンは20世紀になると衰退し、多くは発表会の形式に移行した。

この四つの要因が相乗効果を引き起こして、近代家族におけるピアノ文化の隆盛を起こしたと考えられる。経済企画庁の調査『家計消費の動向』によると、日本のピアノの普及率は、1959（昭和34）年1.6%、1963年3.7%（1963年以前は都市部のみ）、1964年2.6%、1974（昭和49）年に二桁の10.2%、1979年に15.5%、1984年に17.6%、1989（平成元）年に21.9%とほぼ安定的に上昇し、1991（平成3）年の23.3%、1994（平成6）年の23.3%をピークに、1994年以降は静かに下降線を辿っている。これは下のようなグラフに表すことができる。

これまでの300年のピアノの歴史を振り返ると、子どもたちがピアノ・レッスンをする習慣、つまりピアノ文化は、ヨーロッパから次第にアメリカ、東アジアへと拡大している。最初はヨーロッパの貴族の宮廷楽器であったピアノが19世紀近代家族の市民的家庭楽器となり、次第に20



世紀近代家族のグローバルな市民的家庭楽器となっている。この 300 年のピアノ文化を、単なる一つの長期に渡るブームとしてだけ見ることはできない。

これまで見てきたように、ヨーロッパのみならず、ピアノ文化は近代家族を演出するための装置、近代家族を証明する手だてとしての役割を果たしてきた。自動ピアノ、蓄音機などの音響機器が登場しても、依然としてピアノ文化が消滅しなかったのは、子どもたちがピアノ・レッスンすること自体に意味があったからである。このように高価なピアノを購入し、楽譜を買い、練習を促し、ピアノ教師に月謝を払うという意味で、ピアノ文化が親の力によるところが大きいのは言うまでもない。こうして、近代家族とピアノ文化の関係が不可分であることを述べてきたのは、以下で、ピアノ文化を通して、近代家族とその揺らぎの実態をかいま見るためである。

4. ピアノ文化における親子関係の変容

ここからは、神奈川県鎌倉市において十名に実施したインタビュー調査

(1998)の一部を紹介しながら、ピアノ文化の親子関係に迫りたい。簡単に、鎌倉市とインフォーマントについて解説すると、今日の鎌倉市は東京の郊外として新興住民も多いが、1858（安政5）年の通商条約による横浜開港以前には寺社があるだけの貧しい一漁村であり、1879（明治12）年にドイツ人医師が七里ヶ浜海岸を海水浴に適していると評価してから保養地・別荘地として発展した経緯がある。別荘族と別荘族を相手に生業を得る人で構成され、山の手地域と下町地域で成り立ち、もともと地域内の階層差は明確である。インフォーマントは、侯爵家出身者一名を加えた三名（旧市内居住）が定位家族・生殖家族ともに19世紀近代家族型の家族生活、残りの七名（旧市内三名、新市内四名）が20世紀近代家族型の家族生活を経験していた。鎌倉生まれは五名で、他の五名は疎開、結婚、転入で鎌倉在住者になった。インタビューでは、①インフォーマントと親の関係におけるピアノ文化、②インフォーマントと子どもの関係におけるピアノ文化を質問したが、図らずもインフォーマント全員が、自分自身、もしくは子どもや孫がピアノ・レッスンを経験していた。なお、Aさん、Bさん、Dさん、Gさんは二世帯同居の形態ではないものの、親子三世代が近隣に住んでいる。

インフォーマントの属性と特徴（年齢は1998年12月31日現在）

名前	性別	年齢	出身地	鎌倉居住	属性・住所・家族類型
Aさん	女性	79歳	新潟→赤坂	疎開後54年	元ピアノ教師・旧市内。19世紀型。
Bさん	女性	40歳	一時山梨・長野	誕生後40年	農家・新市内。20世紀型。
Cさん	男性	60歳		誕生後60年	商店・旧市内。20世紀型。
Dさん	女性	75歳		誕生後75年	主婦・旧市内。20世紀型。
Eさん	女性	86歳	東京・目白	結婚後63年	侯爵家出身・旧市内。19世紀型。
Fさん	男性	72歳		誕生後72年	元高校教師・旧市内。20世紀型。
Gさん	女性	86歳	東京・原宿	結婚後64年	主婦・旧市内。19世紀型。

Hさん 男性 57歳 北九州	転入後 25年 大学教授・新市内. 20世紀型.
Iさん 女性 43歳 群馬・藤岡	転入後 13年 パート主婦・新市内. 20世紀型.
Jさん 女性 52歳	誕生後 52年 ピアノ教師・新市内. 20世紀型.

(1) 19世紀近代家族のピアノ体験

Aさん(79歳)は、①新潟で育ち、1927(昭和2)年小学校二年生の時、突然家にヤマハのアップライト・ピアノが運ばれてきたのがきっかけでピアノを始め、東京音楽学校で学んだ。「誰も持っていないようなピアノが来たもんですから、嬉しくてね。まあポンポン弾いて……。当然のこととしてやっぱり弾けるようになりたいと思いますわね。母はそれが狙いだったと思うんですけれども(笑)」(下線は引用者による)と、親とは一緒に住んでいなかったので自分の主体性も自覚している。富山県高岡市で女学校の先生をしているとき琴を習った。東京で結婚し、鎌倉に疎開してから昭和20年の2月に、夫がスタインウェイのマホガニーのアップライト・ピアノ(当時8,500円)を買ってくれた。嫁入り道具として持参したヤマハのアップライト・ピアノと、広間にあったブロードウッドのマホガニーのグランド・ピアノは東京大空襲で焼けてしまう。②「子どもたちに四つ五つのころ教えておきますと、義母が『あなたがピアノをやったからって言って、そんな嫌がるのに無理にさせることないでしょ』って、よく姑に、私が叱られましたけれども(笑)。自分から喜んでやる、っていうお嬢さんは、あんまり無いんじゃないでしょうかね」。次女は音楽高校受験で失敗し「もう『お母ちゃまの人形じゃない!』って言って、反旗を翻し」たが、子どもも孫も絶対音感を持ち、孫の一人はピアニストになった。「孫たち全部に教えたんですけれども、やっぱりあんまりきつく言いますと、『どうしてお祖母ちゃんは、私たちにばかりきついのか?』って言いますのよ」とかなり積極的に指導していたことが分かる。1956(昭和31)年頃から七十歳になるまでピアノ教師であった経験もふまえて

「やっぱり家にピアノがあるからするようになりますのよね」と、親の環境づくりや誘導によって子どもはピアノ・レッスンをすると語る。グランド・ピアノ四台とアップライト・ピアノ一台の持ち主。「『娘とコンチェルトを弾きたい』っていうのが、私の夢だったんです」という夢は叶えられた。居間にはスタインウェイとベーゼンドルファーのグランド・ピアノが二台並び、次の夢は親子三代のホームコンサートだと語る。

Eさん(86歳)は、①目白の「軍人の家だったけれどね、割にねまあ何とか。贅沢なことは全然許さない質素な家でしたけれども、勉強することとか芸術的なことはさせてくれました」「小さい時に無理矢理にさせられた覚えはないけど、小学校入った時期から始めてたと思うわね。それで、女の子だからピアノってことはやっぱりあの当時でも思ったわけよ」「毎日、今日は何のお稽古だってふうなことでやって、三人女の子ぞろぞろと続いて生まれてたからね。私一人じゃなしに、三人みんなね一緒に、お琴もやったし、踊りもやったし、それからピアノもやって。一人終わると『ありがとうございます』ってお辞儀して(笑)次のが行ってやる、ってんなんでね」。東京音楽学校を出た先生が家に教えに通ってきた。小学校の後半から歌を始め、英語も習った。「両親がやっぱり軍人の家だけれど、やはり『女性としての嗜みっていうのかな、情操教育ってのは大事だ』ってことは考えてたらしいのね」「父も母も、やっぱり『情操教育は必要だ』ってことは考えて。特に女の子だからね。いろんな意味でね。嗜みっていうのかな、それを仕込もうとは思ってたらしいのね。だから、勉強を妨げない程度でね、お稽古事は割に自由にさせてくれたんでね。私たちもそんな意味でやってたのね」「女の人はいろいろ、芸術的なことを知ってるってことは、子ども育てる上にもいいと思うんだけどね」というように、子どもを育てる女性の嗜みとして親がさせるが、子どもも嫌々させられるわけではない。学習院の高等科を出た後、難なく声楽で国立音楽大学に入学した。リートが専門だが、作曲もしたことがある。音楽大学在

学中に茶道・華道・料理をした。②結婚して鎌倉に住み、三人の息子たちにもピアノなど稽古事をさせた。「ピアノは小さい時にずっとやらせましたけれどね、ピアノと絵をやってましたね。図画ですね（笑）。そんなことをお稽古事にして、男の子だけどさせてましたわ」「（先生に）家へ来ていただいて、それで当時ね、Tさんの上のお嬢さんだったかな。他にも一人二人ね、一緒に来て、うちの食堂で音楽や絵を教えていただいたりしてましたけどねぇ」。

Gさん（86歳）は、①原宿で育ち、昭和3年頃から三年ほど「女学校の頃にピアノをちょっとだけしてましたけれどね。（中略）（ピアノは）その頃無かったの。父は自分が謡しているので『洋楽器は絶対に買わん』って言ってね。それでまあ、学校に練習所が沢山あったものですからね。学校で練習してましたのよ。それで兄弟の後の子になったら、ちゃんと（笑）買って貰って」と父親は洋楽器に対する拒否反応もあったが、「まぁ親がね。そうですよ。自分からっていうのはなかなか」「小さいうちは親が『しなさい』っていうことで、行くようになるんですわねぇ」「なんかもう親戚とかまわりの方がするもんで、習慣のように、お琴のお稽古だけはしたのね」「みんな、お手伝いさんに縫って貰ったりなんかして、ずいぶん母に叱られたんですけどね」というように、周囲の環境や親の誘導があるようだ。子どもの立場としては、従姉妹や姉と何を稽古するか相談し、円タクで稽古に通うのが楽しかった。華道・料理もする。「みんな従兄弟とか二つ違いの姉とかが集まると『今度何したいわね』っていうことで話しているうちに、次々とそういうのしてたんですけどね」「通うのが楽しかったのよ（笑）。家から出て解放されるっていうのが楽しかったの。『子女たるもの』なんて、父の方が厳しゅうございましたのよ」「でもそういうところへ行くことも一つの社会に出ていくことで、家のなかにいたらただこもってるんじゃないくて、その習うこともいいですけども、人との接触とかを見せてもらえるんだな、と思いましたわ。『何のため』とか

は分かりませんが、『行きなさい』って言われるから行ってるだけでね」。②結婚して鎌倉に住み、娘は「何にもお稽古事しないまま。そうする時間も無かったものですからね。武蔵小金井（の病院）まで下宿しないで通ってましたから。そこに結婚するまで行っておりまして、ほんとに何にもしないまま（笑）。お茶とお花だけは行ってましたね。それだけで、あとは何にも（笑）」。

孫は「そういうお稽古事しないでいいのかしら、と思って見ているんですけども、もういい歳になって、結婚の適齢期も過ぎてるんですけどね。娘の方の孫たちもそうよ。お料理だけお稽古してますけどね。みんな歳が来ても、今みなさんご結婚が遅いでしょ？」

(2) 20世紀近代家族のピアノ体験

Bさん（40歳）は鎌倉生まれ、①母親に「行きな」と言われオルガン教室に行った。「オルガン行ったけど、私には才能無かった。っていうかね、違うことやって遊んでたよね。習ったことじゃなくて、あの頃ちょうど連弾が流行ってたんだよね、学校で」「何カ月ぐらいかな。昔のやり方で、公会堂に先生が来てくれて、一人30分ぐらいかな。そういうやり方で教わってたと思うんだ、多分。赤いバイエルから。（中略）来てくれてた先生が、ご主人が具合が悪いとか、転勤でどっか一緒についていくとかで、半年ぐらいでいなくなっちゃったの。で、後任の先生が来ないのよ。こういう田舎だから。それで、そのままになっちゃったの」。だが家の手伝いもしなければならず通うのは面倒で、「何しろ仕事があんだよ（笑）。あの頃から。だから、どっちかっていえば、私が一番上だから特にそうなのかもしれないけど、習い事する暇があったら家の手伝いをしないと間に合わなかったのよ」と自身の子どもの頃を振り返る。②結婚し、夫の転勤の頃、知人にもらったキーボードで、娘が一時期ピアノを習ったことがあった。「『やりたいことがあればやらせてあげるから、なんかやりたいことがあったら言っておいで』って言っておいたけど……。まあ、娘は『ピ

アノやりたい』って言って、しばらくはピアノを、本人がやりたいって言うからやらせてはいたけれども、長野で一年ぐらいやったかな？」離婚して鎌倉へ戻り、娘は半年くらいピアノを続けたがピアノを買う気はない。「子どもがうんと小さい、それこそ幼稚園とか小学校の低学年であれば、親がついてピアノ教えたり、ね、そばにいて教えるのもコミュニケーションでいいかな、と思うけど」、母親が自分が教えるのではなく習い事に行かせてしまうから、自分が習ったことが何の役にも立たない。「親が与えなくても、やり方はあるのよ。『そこまでやりたいんだったら』って親は思えばいいのよ。子どもの後から。『そこまであなたがやりたいんだったら、やらせてあげようかしら』って思うのが、普通の親だよ。最初から与えることなんてない」、子どもが紙鍵盤から練習するくらいであれば考える、とも語る。「本人から言ってこない限りは、何もさせない。うん。親が要求することじゃないし」「親がルールを引いたからって親の上は行かないもの。親がルールを引いた子ほど、親の上には行かない。だから、自分の子を何とか育てたいと思ったら、ほっとくのが一番よ」。娘はブラスバンドに入り、独学でクラリネット、フルート、トランペットを吹くようになった。

Cさん(60歳、男性)は、①学校に数台しかなかったピアノは触らせてもらえなかったし、男子だから触らない。小学校の頃にピアノを習っている友だちはいなかった。親もたいへんな時期だった。中学二年で父親が亡くなって、家の手伝いが忙しかった。そろばん塾は行って、先生の手伝いもできるほどであった。②「かみさんが子ども育てるにはね、やっぱり男でも女の子でもピアノ習う子がね、けっこう多かったから。自分もできなかったしするから、一つ望みとして、そろばん、お習字、ピアノだったかしら？アップライトのね」「娘が習ってたピアノの先生などもいらっしまったけど、その方も辞めちゃったしね。その当時教えてて、結局『親が体の具合悪くなっちゃったから』ってね、辞めちゃって。だからうちの

娘なんかも、自然自然に、ピアノ一時習ってたけど、辞めちゃって」
うように、妻の希望でアップライト・ピアノを買い、子どもには一時期ピ
アノをさせた。「その頃はまだまだ、日本全体が上昇気流に乗ってる時で
したからね、どこの家庭でもピアノ買って、またスイミング習わせると
か、バレエを習わせるとかって、親の見栄でみんなやってたみたいよ
(笑)」と自己分析し、今では「親の考え一つじゃないのかなあ。あと、子
どもが面白さが分かってくれればね、五年十年って続けて練習するだろう
けど」「親が強制するのもどうかな、っていう感じね」「嫌いなものを無理
にやらせることないよ、って」思っていると語る。

Dさん(75歳)は、①華道・書道・謡の稽古事をしたが、時代の巡り
合わせでできなくなった。「あの頃は、お稽古はできなかったでしょ」「お
稽古してる人、そういう習い事してる人って少なかったんじゃないです
か。私が知ってる範囲では、階級があるでしょ、きっと、家庭環境やいろ
いろのね、あれで、と思いますけど、私のまわりでやってる方は少なかっ
たですね。無いことは無いけど、少ないですよね」。②「うちの子が中学
頃の時には、もうあったかもしれませんが、私もいろんなことで
(悩みが)あったもんですから、気がつかなかったけど。(中略)そんな余
裕無いですもの。生活がたいへんでしたから。主人がソ連に抑留されて
帰ってきたでしょ」と、夫が後の人生は余録だと捨て鉢になっていたの
で稽古事どころではなかった。孫は『『お稽古に行く』なんて出ていったこ
と無い。上の子も塾とかなんか行きませんでしたよ。『そんな四人もいる
のにね、塾なんか行くお金ない』なんて言って(笑)』『『自分は(ピアノ
を)小さい時からやりたかった』って言ってね。ほんとに高校の時に音楽
学校入りたかったらしいんですよ。それでちょっと行ったんですけど
も、全然無理だってって。それで辞めちゃって」と、親が子どもに強制す
るという意識はないものの、ピアノを習い始めたが挫折し、すぐやめてし
まう。

Fさん(72歳, 男性)は, ①「お袋がお習字の先生だったのよ. だからお習字, っていうと逃げたわけ(笑). 妹は引っ捕まってやらされてたけどさ」「小学校から中学の後半になると, お稽古事じゃなくて, もう食べるものもろくすっぽないわけでしょ」「僕らの世代, 僕らの仲間だったら, お稽古事っていうと, 特に男の子だと無かった. うん. いわゆる. だって, やるもんないでしょ, 時代が時代だから. 例えばピアノ弾くとかヴァイオリン弾くとかさ, そんなこと考えられないし, そういうのは全くないね」時代的に稽古事をしていた友だちはいない. ②「うちの女房もお琴やってたもんだから. それだからじゃないかなと思うんだね. 家にお琴があったからね. そうだろうと思う. そうでなきゃね. ピアノとかヴァイオリンとかってよりも『お琴習いたい』って」というように, 妻の影響で娘が琴を習い, 国立劇場で発表会をした. 環境が子どもを稽古事に導くと考え. 発表会で写真を撮ったり, 練習の送り迎えをして協力した. 息子はギターを習った. 孫はピアノを習っている.

Hさん(57歳, 男性)は, ①九州で育ち, 「何か家にオルガンがあったの覚えてます. 黒いね. ペダルがついててこうしてね」というように家に足踏みオルガンがあったが, 「僕の二つ下に妹がいますけどその子辺りからは, いわゆるお稽古みたいなのね, 始められたんじゃないかな. ちょうどその頃から我が家の経済的余裕がでてきたような気がしますね. だから妹は, ピアノなんかも習ったんじゃないかな. うん. あるいはそのピアノは家で買ったと思いますね. 妹が何歳ぐらいだろうね. 僕はやった記憶が無いし, ほんのわずかな二年間だけど, 男と女と当時は違ったのかな」. 1955(昭和30)年頃に国産のアップライト・ピアノとステレオを買った. 町内会で英語教室をしていた. 稽古事ではないが, 本好きになったのは姉の影響である. ②鎌倉に引っ越して「やっぱり奥さんの方がそういう環境を. 何年にピアノ買ったのかは覚えてないですけど. 居間に置いてましたからね」「『いろんなことやラしたい』というのが母親のね」というよ

うに、妻の希望でピアノを買い、居間に置いた。男子も含め、四人の子どもは全員ピアノをした。息子が小学校高学年の時『そうしたい』と言わないのに、偉い先生のところにつれて行って失敗したこともあるし、ピアノで進学したがったのに『今からでは遅い』と言われ挫折した子どももいた。「僕らは自分がやってないから、分からないですよ。どういうふうに環境をしたらいいのか。非常に頓珍漢なことをやってしまうというか」と、親としての環境づくりの難しさを語る。フルートやコントラバスをした子どももいる。

Iさん(43歳)は、①群馬で育ち、ヤマハ音楽教室に行った。「まあそうですね。それは楽しかったですね。割とね。(中略)それは五・六人で、一人一台ずつその当時はオルガンですよ。ピアノではなくて(電気の)オルガンがあって。(中略)私がこう楽しそうにやってると思ったらしくて、親が『じゃあピアノをやったら?』って、ピアノを個人の先生にもついていたんですけど(笑)、それは三カ月でダメでしたね」「自分で気がつくはずはないですから、多分親が行かせようと思ったんだと思いますけれど」と振り返る。習字・そろばんの教室にも行った。中学生から英語は友だちと家庭教師を呼んだ。華道は「大叔母の熱意に負けて通ってあげた、って感じ(笑)。だからやっぱりね、自分からやらないものは身につかない」。

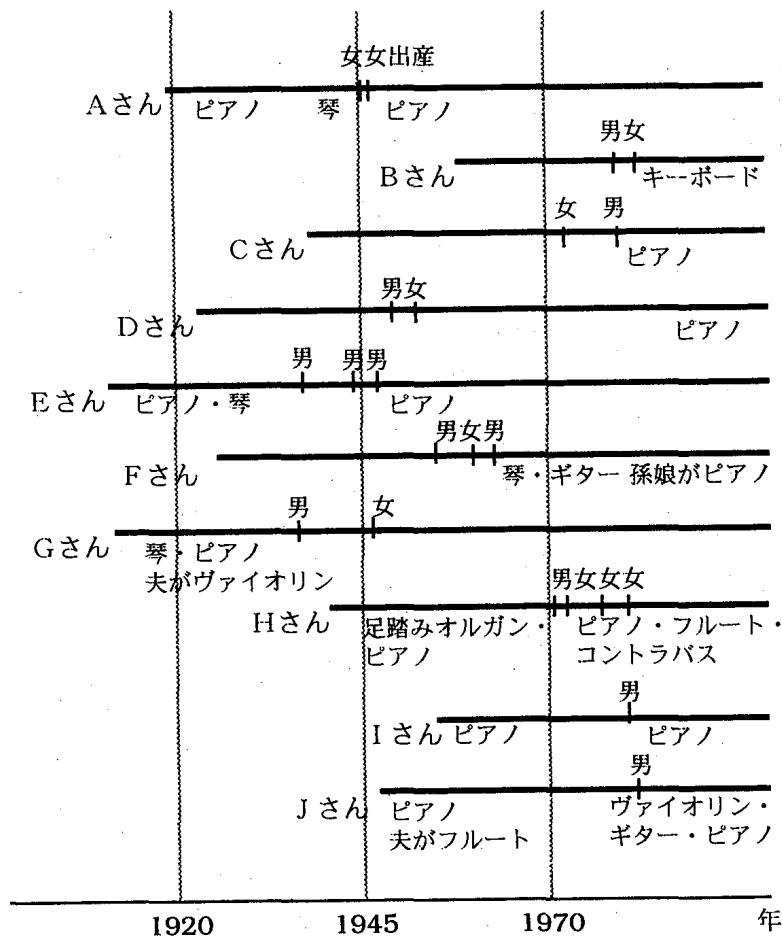
②息子はヤマハ音楽教室に入れた。「誘われて、『やらない?』って。で、私も自分がやった覚えがあったので、『あ、音楽教室だったらグループだし、楽しいかもしれない』と思って、(中略)発表会とかはやってましたけど、もう嫌々やってたみたい。小学校の一、二年か、二年かな」。夫の妹のピアノを運んで「ピアノ二年間弱やりましたけど、やる気がないのにやらせたらダメ、っていうことがすごくよく分かって。やっぱり練習が苦痛ですからね。やりたくない人にとってはね。次のお稽古までに、やっていかないことにはねえ。まして個人でないとすると他の人の足を引っ張っちゃうから、『ある程度やっぱ弾いていかなきゃ』と思うと親がやらせな

きゃなけないでしょ。それがもう、すごいストレスで。親も子も。親子関係にヒビが入ると思って、最後はもう辞めました」「本人がやりたければ親としてはやらせてみたいな、と思いますね。本人があくまでもやりたければ、もうそれに尽きると思いました」と本人がやりたければを強調する。だが、美術については「本人が『いい』と言ったのでそれはやらせなかった。でもそこはちょっと分からない。行ったらきっと本人も面白かったかもしれない」「親は本人が興味あるんだったらやらせればいいかな、と思う。その時にはモノにならなくても。とりあえずほら、やったことないのを始めるのは億劫だけど、ちょっとやってるとね」とも語る。茶道・華道については、「やっぱりやりたくなかった時でいいと思うのね。今時そういうのって無いんじゃない？（中略）私たちの頃、まだ親の年代がそういう考えだったから。（中略）そんな（笑）今時」今時嗜みなんて言わないのだからやりたくなかった時にやるのが良いそうだ。

Jさん（52歳）は、①「私は三歳半ぐらいの時に、自分で『ピアノを習いたい』と言ったそうですね。（中略）（家にピアノは）無かったでしょうねえ。その時は、ただ北鎌倉駅の、ちょうど今大きな大邸宅になっているところに、ピアノ先生がいらっしゃったんです。で、多分そこから何か聞こえてきたんじゃないかと思うんですね。ピアノの音が。何かよく分かりません。とにかくでも、そういうふうに親は言っております。私の意志で。親がやらせたわけではないんです。私に限ってはね」。②親としては親の希望があり、息子がヴァイオリンを選ぶように仕向けた。「やはり親として子どもにやって欲しいことあるでしょ？ だけど『やんなさい』っていうのは私も良くないと思ったから、選ばせたんです。『こうゆうのとかうゆうのとかうゆうのとあるけど、どれやりたい？』って。（中略）主人がフルートやって、私がピアノ弾くでしょ。そうするとヴァイオリンがあると将来トリオができる（笑）。それでそういうなんか夢を描いてね、『子どもにヴァイオリンやらせたいな』なんて思ってたの。でも

『ヴァイオリンやんなさい』って言うのと絶対いけないと思ってたから」。息子は今、ヴァイオリン、ギター、ピアノを弾く。「親が全然分からない世界のギターに走った。それなりの、言っちゃ何だけど、素地があるから、ギターに夢中になったらかなりできるわけよね。面白くてしょうがないのね。彼の世界は初めてギターで出たかな」。またピアノ教師24年の立場から、「親がねやはり『もう少しピアノが上手になったら買ってあげます』とかね（笑）。『子どもがあんまり練習もしないのに買って』とかね。そういう、それって逆作用なんだと思うんですね。買えるんだったら買ってあげてね、そしたら子どもは意欲が湧くんだと思うんだけど、でも『弾けないから買いません』でしょ。だから、やるようになるように買って

インフォーマントの定位家族・生殖家族の楽器リスト



てあげれば変わるかもしれない。それもやはり親の考え方よね」，と親の意識を問題にする。

(3) 四つの要因

インフォーマントにおいてもピアノは市民的家庭楽器であるが，そうになったのはヴェーバーの言うように彼らが「市民的な家庭の楽しみ」という文化をもっていたからというよりも，近代家族イデオロギーが浸透したからであろう。19世紀近代家族，20世紀近代家族について，やはり経済的要因，教育的要因，ジェンダー的要因，資本的要因の四点は認められる。19世紀から20世紀にかけての近代家族のライフスタイルの中で，ピアノ文化が私たちの家族生活や精神生活をどれほど豊かにしたのかは，到底計り知れない。

そして近代家族の揺らぎは，この四つの要因それぞれの貧困や要因同士のバランスの崩壊から起こるものである。経済的余裕がなければ親は子どもにピアノ・レッスンをさせることはできない。親の教育意識が多様になるとピアノ文化も画一的ではなくなる。ジェンダー観が変わればピアノ文化の実態も変わり，ピアノ文化が資本を帯びなくなると他の要因に関わりなく衰退する。

今日では，ピアノ普及率が伸び悩み，ピアノ教室の生徒集めに困難が生じていることについて，少子化が原因ではないか，英会話やスポーツなど稽古事に幅ができてピアノ人口が拡散したからではないか，と憶測されている。だが何よりも，ピアノ文化に対する社会的な受け止め方自体が変化し，親の考え方も変化してきているから，と考えるのが適当であろう。以下では，19世紀近代家族，20世紀近代家族，近代家族の揺らぎの中で，親子関係を詳しく検討する。

5. おわりに

(1) 19世紀近代家族

19世紀近代家族型の家族は鎌倉市では「お別荘さま」であり、別荘族を相手に生業を立てている地の人とは一線を画していた。例えば、別荘族と地の人の子ども同士が「〇〇ちゃん」と呼び合うことはなかった。別荘族の子どもが地の子どもを「〇〇ちゃん」と呼んでも、地の子どもは別荘族の子どもを「〇〇ちゃん」とは呼ばず「お嬢さん」などと呼んでいた。歴然とした階層差があったのである。同じように近代家族といっても、19世紀近代家族と20世紀近代家族では、ピアノ文化が意味したものが異なり、両者の文化資本の違いが如実に表れている。

だが、単なる階級決定論ではなく、時間と社会関係を取り入れ、構造化されつつも活動的な過程としてピアノ文化を捉える必要がある。労働者階級は一方で階級闘争を繰り広げながらも、自らの家族をブルジョワ家族化、近代家族化しようと葛藤し、家族内闘争をしてきたのである。近代家族イデオロギーの四つの要因、つまり経済的要因、教育的要因、ジェンダー的要因、資本的要因に沿って検討する。

第一に、経済的要因について考える。第二次世界大戦中はピアノや芸術はもちろん、生活自体が困難を極めたが、19世紀近代家族型のインフォーマント三名は、家事使用人のいる家庭で育ち、戦前の東京あるいは地方都市の恵まれた環境の中でピアノ文化の機会を得ていた。

第二に、教育的要因について考える。親はピアノ文化の環境づくりをし、練習を促していた。ここで特徴的なのは、戦後ピアニスト養成が企てられたケースを除けば、子どもは親にやらされながらも共通して満足していたことである。その意味で、ピアノ文化をめぐる親子関係は双方向的で、トラブルはなかった。

第三に、ジェンダー的要因について考える。ピアノ文化は花嫁修業の一

環であり、将来子どもを生み育てる人にふさわしい嗜み、芸術的素養として成立していた。必然的に、ピアノ文化は「女の子だからする」というジェンダー的色彩が強い。

第四に、資本的要因について考える。ピアノ文化が結婚にどのような影響力をもったかどうかは明らかにならなかったが、明らかに上記の三点を含む階層的な証にはなっていた。経済・教育・ジェンダー・資本、これら四つの要因は、19世紀近代家族の階層的ネットワーク、親族ネットワーク、場としての家族生活の中で循環しつつ、親子関係の中により堅固なエートスを形成するようにさえ見える。

(2) 20世紀近代家族

戦後になると、19世紀近代家族も20世紀近代家族とあまり大差のない生活を歩み始め、別荘族と地の人も、孫の世代になると、次第にお互いを「○○ちゃん」と呼び合うようになる。経済的要因、教育的要因、ジェンダー的要因、資本的要因に沿って検討する。

第一に、経済的要因について考える。高度成長期、つまり1950年代半ばから1970年代初めにかけて、サラリーマンと専業主婦が増加した時期には、労働者階級も安定した収入に支えられて、ピアノ文化が大衆化し、隆盛する。五名のインフォーマント自身（Bさん、Cさん、Hさん、Iさん、Jさん）と、インフォーマント（Dさん、Fさん）の子どもは1970年代以降に子育てをしたが、ピアノを買うかどうか、エレクトーンや電子ピアノ、キーボード類で代用するかは別としても、ピアノ文化は大衆化していた。

第二に、教育的要因について考える。身分制度の崩壊と平等意識の浸透の中で、子どもをかわいがる愛情や、子どもの教育に向けての強いエートス（アリエスによると近代的な親が持つ二つの特徴）は強まった。20世紀近代家族型では、母親依存型の親子関係が顕著に見られ、20世紀近代

家族において初めて、インフォーマントの語りの中に「親の強制」という言葉が出てくる。親子関係が親から子どもへ一方向的（親が加害者、子どもが被害者）であるという意識が出てきたのである。

第三に、ジェンダー的要因について考えると、男女比ではやはり女子の方が多い。20世紀近代家族においても、ピアノ文化の大半は女性によって担われてきた。20年ほど前まで、ピアノ・レッスンをしている男子の中には、友だちから「男のくせに」とからかわれるので、友だちに隠れて練習をし、友だちに会わないように隠れてレッスンに通っていた子どももいた。だが20世紀近代家族においては、女子の嗜み、花嫁修業という意味づけは稀薄になった。

第四に、資本的要因について考える。サラリーマン世帯の子どもではなかったBさんとIさんも1960年代にピアノ（オルガン）・レッスンをしていた。次第にピアノは誰でも購入でき誰でもレッスンできるものとなり、もはやピアノ文化ピアノ・レッスンをすることだけで差別化を図ることはできなくなった。だが、ピアノ文化を共有する人たちの間には、近代家族イデオロギーを内面化する者同士の仲間意識のようなものが見られる。

19世紀近代家族では稽古事を親にさせられた子どもも満足していたのに、なぜ20世紀近代家族型はピアノ文化の中に親子ともストレスを感じたのであろうか。20世紀近代家族には元来嗜みをしつける考え方がなく、親が経験しなかったことを子どもにさせなければならないという無理が生じてしまったという理由が考えられるであろう。また、19世紀近代家族が20世紀近代家族に移行したり、親子（特に母子）が親族ネットワークから引き離された場合には、階級や家系の自然な習慣という認識が稀薄になり、母親から子どもへの直接的で一方向的な関係になってしまうのである。

(3) 近代家族の揺らぎ

それでは親子関係の変容に注目して、近代家族の揺らぎと考えられるものを、上の四つの要因から検討したい。

第一に、経済的要因について考える。バブル崩壊後、親は将来への不安をかかえ、そのようなことができるほど親全般に経済的な余裕があるわけでもなく、また、親に余裕があっても生活目標は向上する中で、必要以上の出費を控える傾向にある。「子どもが興味を持つかどうかは分からないがピアノを買ってみよう」とは考えにくくなっており、「子どもがやりたいのなら」が親のキーワードになっている。

第二に、教育的要因について考える。親にとっては子どもの将来が一番大切である。相対的に、自分が子どもを教育しようという強い意志のない親は「子ども自身が自分で考えることで力がついていくので、それが一番大事である」と考え、子ども自身の決断を待つ。親自身がピアノ文化を経験していても、子どもを中心とした教育観が浸透する中で親の強制を反省し、ピアノ文化を子どもがすべきことの中には位置づけず、ピアノ文化の必要性を子どもに判断させるようになる。

第三に、ジェンダー的要因について考える。ピアノ文化が特に女性の中で広まった背景には、良妻賢母の思想があった。近代家族において、女性は家族員のケアラーであり、ケアラーであるべきであったからである。だが、最近では全体のピアノ生徒数が減る中で男子生徒の割合が増し、ジェンダーによる拘束から徐々に解放されている。女子の嗜み、花嫁修業という考えとは結びつかないので、結婚との関係はほとんど皆無である。

第四に、資金的要因について考える。発表会以外にピアノ演奏の場が少なくなり、親子関係とともにピアノ文化自体も密室状態にある。ピアノ文化のために生じた親子関係の歪みや、ピアノの能力にこだわるあまりに生ずる、練習の末の挫折感・空虚感・トラウマは焦点となりやすく、もはやピアノ文化が理想的な家族生活に直結して認識されることがない。練習す

る上で苦痛を伴うピアノ文化を、子ども自身が必要不可欠なものと認識するわけでもない。また、あまりにピアノ文化が大衆化したために、どのようなピアノで練習し、どのような先生の門下に入るのかが差別化の基準となり、満足感を得にくくもなった。

ここで、ピアノ文化もピアノ自体も個人化したことを想起したい。それはサイレント・ピアノである。それは誰に迷惑をかけることなくヘッドフォンでピアノを楽しむ世界であって、家庭音楽や社交の場で（特に楽器のアンサンブルや連弾で）かいま見られた独特のムードを損なってしまった。そういう意味で、他者による承認は得られにくくなっている。

(4) 近代家族の規定力

ピアノ文化は、貴族没落以降の19世紀近代家族の台頭、20世紀近代家族の大衆化、そして近代家族の揺らぎ、というように、常に社会の変化と親子関係の流動化の最先端を通り過ぎてきたように見える。また、親が主導権を取ってきた教育の在り方、いったん画一化した近代家族のライフスタイルがここにきて多様化したようにも見える。だが、上で述べた近代家族の揺らぎはおおむね子育てを終えた人たちが到達した結論であって、子ども主導で子どもが育つと言い切り実行している人はわずか一人である。子ども主導、子ども中心という思想自体、近代家族がもともともっていた特徴でもあるのだ。近代家族は本当に揺らいでいるのか疑問になるところである。また、親にとって子どもが大事である限り、「子どもの才能を見いだすことが親の務めである」と考え、ピアノ文化に限らず教育環境を作り、子どもにやらせる親はなくなるであろうし、その強いプレッシャーにストレスを感じる親も子もなくなるであろう。

近代家族の制度としての規定力が、依然として、厳然と存在していることも忘れてはならない。ピアノ・レッスンの大半が、現在でも親の誘導をきっかけとして始められることから明らかなように、現状では子どもの

教育や生活の環境づくりは子ども本人の能力だけではなしえないので、親に頼らざるを得ない面がある。また、親、子ども、ピアノ教師の三者がピアノの上達のみを目的にレッスンに臨んでいる場合には望むべくもないのだが、レッスンのピアノの上達以外の効果として、親の知らないうちにピアノ教師が子どもの相談相手になるケースがあった。ピアノ教師は、生徒の弾くピアノの音を聞くとその子どもの心身の健康状態が分かり、場合によってはレッスンを中断して相談相手になる、というのである。ピアノ・レッスンは学校や受験勉強にあまり関係がないので、子どもにとって比較的プレッシャーが少なく、ピアノ教師は話しやすい相手なのであろう。そういうことを意図していなかった親にとっては、幸運な誤算ではないだろうか。今や子どもの親以外にも、例えば、学校や塾の友だち・先生、日ごろ近くにいたり電話やインターネットなどで連絡を取れる相手、マスメディアなど、子どもの育児資源は豊富にあるように思われる。だが、親が子どもとどのような相互関係を持ちながら、トータルな子どもの環境づくりをコーディネートしていくのかは今後も注目されるべき重要な課題である。

〈注〉

- (1) 木下栄二[1996]が1970年以降の研究を、山根真理[1999]が戦後の研究を整理・検討している。
- (2) 落合がまとめた近代家族の特徴は、第一に、家内領域と公共領域との分離、第二に、家族構成員相互の強い情緒的関係、第三に、子ども中心主義、第四に、男性は公共領域・女性は家内領域という性別分業、第五に、家族の集団性の強化、第六に、社交の衰退とプライバシーの成立、第七に、非親族の排除、(第八に、核家族)である[落合, 1985→1989: 18; 1997: 103]。
- (3) 1911年頃の草稿『音楽の合理的社会学的基礎』(『経済と社会』の付論として所収)におけるヴェーバーの問題意識は、ヨーロッパと同等の音楽文化を持ち多声音楽が行われたところは多いのに、なぜヨーロッパだけでハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンなどの音楽や近代的音組織が発展できたのか、ということであり、ヨーロッパ音楽成立のためには楽器と楽譜、つま

り整律と合理的記譜法の合理化が不可欠であったと述べた。これらの業績に最も大きく関与したのは、初期中世の修道僧で、合理的記譜法も鍵盤音楽も修道院を舞台として発達した。近代に固有の第一の鍵盤楽器オルガンは14世紀以降、大聖堂の楽器として、第二の鍵盤楽器ピアノは家庭の室内楽器として普遍化した。

- (4) 1974年8月28日、神奈川県平塚市で、当時、離婚話などのもつれで悩んでいた階上の男(46歳)が「ピアノがやかましい」と団地の母子三人(母33歳、長女8歳、次女4歳)を刺殺する事件が起きた。

〈参考文献〉

- 有地 享 1986『日本の親子二百年』新潮社。
- Ariès, Philippe 1960 *L'enfant et la vie familiale sous l'ancien régime*, Paris: Plon.=1980 杉山光信・杉山恵美子訳『〈子供〉の誕生 アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房。
- Bourdieu, Pierre 1979 *La Distinction: Critique Social du Jugement*, Edition de Minuit.=1990 石井洋二郎訳『ディスタクシオン: 社会的判断力批判(I, II)』藤原書店。
- De Mause, Lloyd 1973→1974→1982 "The Evolution of Childhood", *Foundations of Psychohistory*, New York: Creative Roots.=1990 宮澤康人・野村俊明・松島豊訳『親子関係の進化 子ども期の心理発生的歴史学』海鳴社。
- 江原由美子 2000「母親たちのダブル・バインド」目黒依子・矢澤澄子(eds.)『少子化時代のジェンダーと母親意識』新曜社: 29-46。
- 姫岡 勤・上子武次・増田光吉(eds.) 1974『現代のしつけと親子関係』川島書店。
- 片岡栄美 1993「社会階層と文化的再生産」『理論と方法』7-1。
- 経済企画庁調査局 1959-2000『家計消費の動向』大蔵省印刷局。
- 木下栄二 1996「親子関係研究の展開と課題」野々山久也・袖井孝子・篠崎正美(eds.)『いま家族に何が起こっているのか』ミネルヴァ書房: 136-158。
- 小山静子 1991『良妻賢母という規範』勁草書房。
- 小山 隆編 1973『現代家族の親子関係 しつけの社会学的分析』培風館。
- 牧野カッコ 1973「親子関係の研究法について」青井和夫・増田光吉(eds.)『家族変動の社会学』培風館: 278-303。
- 目黒依子 1987『個人化する家族』勁草書房。
- 宮島喬・杉原名穂子・喜多加実代・吉原恵子 1992「文化としての『ジェンダー』とその維持のメカニズム 大学生調査の分析から」『お茶の水女子大学女性

- 文化研究センター年報』6.
- 宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘 1997『未婚化社会の親子関係 お金と愛情にみる家族のゆくえ』有斐閣.
- 水野宏美 1999「近代の家族生活とピアノ文化 鎌倉市を事例として」(修士論文).
- 落合恵美子 1989『近代家族とフェミニズム』勁草書房.
- 1994→1997『21世紀家族へ 家族の戦後体制の見かた超えかた(新版)』有斐閣.
- 1996「近代家族をめぐる言説」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉(eds.)『岩波講座現代社会学第19巻 〈家族〉の社会学』岩波書店: 23-53.
- 奥井復太郎 1940『現代大都市論』有斐閣. →1996 川合隆男・山岸健・藤田弘夫(eds.)『奥井復太郎著作集 第5巻』大空社.
- Rousseau, Jean-Jacques 1762 *Émile ou de l' éducation*. = 1962 今野一雄訳『エミール』(岩波文庫) 岩波書店.
- Shorter, Edward 1975 *The Making of the Modern Family*, New York: Basic Books. = 1987 田中俊宏・岩橋誠一・見崎恵子・作道潤訳『近代家族の形成』昭和堂.
- 玉川裕子 1998「お琴から洋琴(ピアノ)へ 山の手令嬢のお稽古事事情(特集ジェンダーと音楽)」『音楽芸術』音楽之友社, 56(12): 70-76.
- 上野千鶴子 1994『近代家族の成立と終焉』岩波書店.
- 渡辺秀樹 1994「現代の親子関係の社会的分析 育児社会論序説」社会保障研究所(ed.)『現代家族と社会保障』東京大学出版会: 71-88.
- 1999「戦後日本の親子関係 養育期の親子関係の質の変遷」目黒依子・渡辺秀樹(eds.)『講座社会学 2 家族』東京大学出版会: 89-117.
- Weber, Marianne 1926 *Max Weber: Ein Lebensbild*. → 1950 Neue Auflage. = 1963/65 大久保和郎訳『マックス・ヴェーバー I II』みすず書房: 35.
- Weber, Max 1921 → 1972 *Die rationalen und soziologischen Grundlagen der Musik*, Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck). = 1967 安藤英治・池宮英才・角倉一朗訳『音楽社会学』創文社.
- Weber, William 1975 *Music and the Middle Class: The Social Structure of Concert Life in London, Paris and Vienna between 1830 and 1848*, London: Croom Helm. = 1983 城戸朋子訳『音楽と中産階級 演奏会の社会史』法政大学出版局.
- 山田昌弘 1994『近代家族のゆくえ 家族と愛情のパラドックス』新曜社.

—— 1998「少子時代の子育て環境 子育ての動機づけの危機」日本教育社会学会 (ed.)『教育社会学研究』63: 25-37.

山根真理 1999「親子関係研究の展開と課題」野々山久也・渡辺秀樹 (eds.)『家族社会学入門 家族研究の理論と技法 (社会学研究シリーズ I)』文化書房博文社: 226-254.

山村賢明 1964「親子関係と子どもの社会化 文化の視点から」日本教育社会学会 (ed.)『教育社会学研究』19: 105-117.